星・過ぎし後

細越夏村

本間文庫
文庫 14
D 221

불충 충신

第四集

詩五十五章

京都帝國大學圖書

ホシスギシノチ

細越夏村

文庫·14
D 221

＊　＊　＊　＊

扉

この狹い扉。
咲き乱れた花むらの後の狹い扉。
日ざかりに、私は、そつと此扉を推して、靜かな世界に入る。

この扉の兩側には、いつでも、騷宴に疲れたバッカスと、肉樂に勞れたヴィナスとが睡つて居る。
これらの覺め易い番人の間を、裾を褰げて忍び通る時、いか

に激しく私の心臓は搏つだろう。

時として、私は鉞を提げて、これらの花むらと番人たちとを一氣に斬り裂かうと思ふ。

けれど、扉のかげの靜かな世界から軈て立ち歸る可き其の廢園を思ひやると、鉞の柄は、いつしか、私の手を拔け落ちて居る。

あゝ、それでも、その自分を私は怒る事が出來ない。

否、鉞から離れた已が空手を眺めた時、私は自分の賢さに、われならず微笑まれる。

そして、私は、傍らの鏡に映つた自分の齡の模樣に見入る。

すると、何者かゞ媚び云ふ——『もつと濃く大くお染めなさい』と。その滑らかな聲！　何故か、それは針のやうに私を刺す。

燈火の無い家

四方皆な壁だ。

私は、天井に唯一つ明いた窓から、夕ぐれの深い靜かな淡い空を飽かず眺める。

斯うして、わが狹い牢屋は、燈火無く、次第に夜を吸ひ込む。
この牢屋は、自分で作つて、自分で入つたものだ。

わが仰ぐ小さい空には、白い星が一つ浮び出た。
それも、やがて、暗い雲に呑まれて仕舞つた。

闇に居て、私は、日の暮れきらぬうちに燈火のつく人の家や町を思ふた。
そして、ふいと、或る白い壁の腹を、西の涯の薄い黄色の空の映りが、夢のやうに這ふて居た黄昏を思ひ出した。

今夜も、私は眠らねばならぬ。

どうかして、すぐに、そして安らかに深く眠りたい。
それが、私の第一の幸福だ。

鏡の壁

行きかへり、行きかへり、私は果も無く、この徑を歩む。
そして、そのやうに亦た、私の、刺を育てた心の痛みも休むことは無い。

なぜ、斯うも、私の行く所には、どこにでも、鏡の壁が立つ

のだろう。

して、又、なぜ斯うも疾く、私の眼は、いつでも、鏡にうつる心の傷の慘酷を見つめるだろう。

けれど、その眼は、曾て俯向いたことが無い。

それは、眼そのものから流れ出るのでは無いかと思はれるまで、鏡の影の傷の血をジッと見つめて居る。

そして、とう〳〵、視覺が疲れきつて、鏡と眼との間に、鈍く光る靄が渦卷く時、睡たいやうな滿足が、痳痺劑のやうに、かすんだ傷の上を、ゆるく〳〵流れる。

塔上

この重い白い門は、わが生の二つの領の境に、嚴めしく立つた高いランドマークだ。

閾を跨いて、日光と青葉と花との園を一方に見る。

そこは、わが笑ひと歡樂との、開いたる平地だ。

また、この狹い扉の間を、他の側に進めば、そこに、暗い臭ひの厚く積もつた梯子が立つ。

静かに響く我が足音の懐かしく、階段を登り、薄黒く涼しい、閉ぢたる塔上に我れを見出す時、わか永久の大いなる友――爽かな静謐が軟らかに我れを抱いて、そぞろに身と心とを甞む。

ここに來て、私はしば〳〵、小窓の下の園をば全く忘れ果て、ものに坐して、終日、この嚴肅を飽かず味ふ。

まひる

葉が白い裏を反す度に、わが樂める心も亦た暗い裏を反す。

そよ風の通ふ青い葉を眺めて、われは、そぞろに波打つ悅樂と哀愁との韻律を我が心に讀む。

小さな窓に集まる夏と我が心との編み合ふ靜かなる短詩よ。

いみじくも適へる譜をもて、自然が默唱し初むる時、われは、うつら〳〵、安らかの夢路をさまよふ。

夏

綠葉の円頂が、灰色の坦らな屋根の上に並み立つ我が離宮を見よ。

窓には、青い林檎の數十が、滑らかな枝を撓め、綠の蔦を纏へる白い壁には、薄い褐色の軟らかな象徴畫が迤る。

また、礎石を繞つて、赤い苺が水々しい星河を流す。

して、こゝに、日光とそよ風とは、草原の活々した香ひを誘ふて來る。

朝ごとに、白く肥えた幼兒どもが、輕い彫刻の有るホールの柱のほとりに、オリジナルな歌と舞踏とを波立たす時、わがペンは音爽かに洋紙の上を走る。

夕がた

薄れた夏の夕日は、煉瓦の家の破風のあたりを赤々と照らし、わが心には、靜かなる悲みが湧く。

鮮やかな綠葉の窓には、オルガンの細い音が緩く流れ。

われは、通りかゝつた露廊(ウエランダ)に立ち止まり、開いたドアの對面(むかふ)の暗い姿見(すがたみ)鏡に映るレースの窓かけの淡い模樣に見入る。

園

こゝに、われは、靜默と共に在る可く、青白い花園を持つ。

光も闇も此園を包んだ事がない。

園の色、それが不斷の明(あか)りである。

われは、何時(いつ)、いかなる所にても、わが欲するがまゝに、この花園に入る事が出來る。

たとへば、われ、一日、津(わたし)を越えて、人の巷にさまよひ、栗の花の醜さと甘い惡臭とを持てる情や、鳥の脚(あし)の卑しい堅さなる心に逢ふた刹那にでも。

軟風

オルガンは鳴りやみ、窓かけの落ちた窓には、熟した櫻の實が、黒い雫の玉のやうに、繁つた葉の間を競ふて垂る。

日は南から、夏の眞晝を燃やし、
緑の木立は、目的地に達した旗行列のやうに、喜びと疲れとをもて、軟風にそよめき立つ。

外廊には、浴服の女たちが、鍔廣の帽子の中にさゞめき、磨かれたテーブルの上には、夏花の、腹凹き花瓶を繞つて、積まれたる帶、リボンなどの色淡き軟らかな匂ひ。

かなたには、槇と枇杷との林を透いて、帆を撒いた藍青の海

が輝き鳴る。

午後一時、
花やかに、うら悲しい砂濱の靜謐を、大いなる雲の影が、おもむろに暗く通る。

鳥

鳥が不思議な啼きかたをして居た。
その時に、私の頭腦は、あまりに縺れ込んだ迷路の網に蒸さ

れて居た。

私は、その自分を驚いて見つめた。

して、それを元の道に伴れ歸るまで、どんなに骨を折つたろう。

日がドンヨリして、木の葉が暗かつた。

その奥から、いやに鋭い笛の音が聞えた。

私は此世に初めて來たやうな氣がする。

どこかで、まだ、鳥が不思議な啼きかたをして居る。

レヴェリー

あゝ、オルガンの滑らかなキイを我が指さきの輕く壓す時、

わがこゝろは、やわらかい喜びに、薫りのやうに溶く。

オルガンのキイの間から、ほのかなるゴムの香ひの軋み立つ

時、わが胸は、遽かなる懷かしさに顫、きふるふ。

その爽かな乳色の涼しい滑らかさに觸れた時、わが指は十の

唇と化つて、わが情調と共鳴するキイの上を飽かず〳〵吸ふ。

そよ風

そよ風は、そこここの葉枝と花の群れとを訪ひ、輕く爽やかな挨拶を撒いて、足ばやに、この白い窓から、廣い笑ひの涼しい氣息を投げかけて行く。

しばしが程、葉の影の搖れるベンチの上に、または、青桐の林の小さい泉のほとりに、お前は、柔らかに踊りながら、滿ち來る光と熱さとの潮を挑んだり、小突いたり、櫟つたり。

その跡

ひと群れの出て行つたあとの、明け放された室に、熟した女たちの香ひは、毒蕈からのやうな濁つた厚い甘さに殘り、窓の油ぎつた葉は、白く磨かれた鐵のやうに光る。

地も微風も眩い午前は、蟬の聲に輕く細かく搖られ。

蓋を上げたまゝのオルガンの上には、斜なりに落ちかけた五

線紙。
錦繪の瓶には草花が頸垂れて居る。
絞られたカアテンの膨らみ。
そのほとりに、脚のべた洋犬が、けだるい眼つきして嗅ぐ。

黑

病める烏が、窓の前に黑々と、そゝぼけて立つた。——死のやうに醜い凄さをして。

そのうしろには、灰色の風が吹き荒れ、拔け殘つた薄い毛がふるえて、きたならしい胸の皮が見える。
どこかで、かすれた瀧笛の音が、濁つた鈍い呻きを喘いで居る。
そこには、煤けた煙突の頂から、文明の黑い旗が渦まき流れて居やう。
そして、いま、遠い領土では、黑い砲煙が、黑い蠻人の群れを貪り呑んで居る頃だ。
薄黑い日。

先刻、あの暗い色の雀が、黑い蝶のブヨ々々した胴を喙いて居た。

樺の下

夢みる我が心よ、そこに白蠟の像と化れ。——お前のやうに若やかな白く細い樺の木の下に。

拂曉の薄暗がりに、お前は、いつも、そこに立ち、呼吸のやうに無意識に自然な歌を唱ふ。——星の消ゑ行く時。

星の消えた時、お前はどこへ歸る。——開いた花の失せたやうに。カアテンのかげの灯の消えたやうに。

夢みる我が心よ、そこに白蠟の像となれ。——お前のやうに若やかな、白く細い樺の木の下に。

見よ、こゝに大理石の小さい供物臺の上に白金の圓い壺が有り、フレッシュな櫻の密を湛ふ。

鏡の前

其のたましひのやうに鏡の胸に沈める青白い花の影よ。
青白い眼と唇とを持てる青白い女の默せるやうに。
鏡の前の青白い花よ。
死んだ女の頰が我が心臟に觸るやうだ。

もつと濃く

綠の丘を越えて、太鼓の音が月を誘ふて來る。
籐倚子を出そう。――もつと前へ、もつと前へ。我等の影が
青葉のそれと共に池のさゞ波に映つるまで、そよ風に搖られ
るまで。
そこで冷しい酒を嗅ぎながら、輕い歌を唱はう。
お前の眉の晴れやかさよ。その額の明るさよ。
やがて、軟かい宵闇が、我等の影を水の上から吸ひ去つた時
には、もつと濃く、あの月が、二人の影を、背後の花園を横
ぎつて染め出すであろう。

かれ！

彼れは、いつでも彼所（あそこ）に立つて居る。今日も。恐らく私の死ぬ日までも。

不思議な彼れ。

いつも私を見つめて、ものも云はず、瞬きもせず、ジッとして私の室の闘の上に立つて居る。

あゝ、彼れ！　ナイフの尖端（さき）に花密を付けて、今日も、私の眼を覗つて立つて居る。

あゝ、彼れ！——運命！

デイト・パアム

波斯棗樹（デイト・パアム）。

その實（み）は指に似たと云はれ、それは、その苗を植ゑた人に見られぬと云ふデイト・パアム。

あゝ、デイト・パアム！　それを植ゑる人よ。われも亦た其の一人だ。

指に似たと云ふ其の實。その指を指す我が心の指！　指よ、
お前は餘りに遠くを指す。
けれど、お前の遠い其の指さしは、わが生の唯一の強い舵で
あり、それ故に又、わが生存期間の誇りである。

わが誇りなる其の指よ。
それは丁度、寂しく萬象を見おろす月に似、そして、わが心
は、その月の產んだ白い夜のやうだ。

黑い鏡

黑い鏡。
それに見入つて、ほゝ笑む女よ、お前の白い齒は、生命の根
に横へられた「死」の大鎌の刃のやうに冷酷の形と色とだ。

ダーリヤの唇から流れる其の朗らかな歌は、この暗い寂寞を、
もつと強く、もつと恐ろしくする。

お前の驕り領ずる、蕾める歡樂の宮殿は、ガラスと花火との
蜃氣樓だ。
して、それは、二つの空と二つの谷との中間にブラ下つて居
る。

女よ、白い鏡を把れ、ソラ！　お前の額には赤い烙印が刻まれ、その鼻の孔は卑惨に裂け潰れて居る。
おゝ、その影！　葉のやうに顫ふお前の心の影！

五月の夕

梨子の花に雨注ぎ、緑の町は蒸れつゝ暮る。
樂しき夜を思ひながら髪洗ふ女に似たる自然よ。

軒よりは油の如き雫し、花の香は、波紋の媚びをもて嬌凭る。
秘房……山羊の腰と脚とを持てる人々……幻影は、ふと消え失せ、汗したる我が肉は闇にわなゝく。

浴室にて

われは、いま、浴室に眼ざめぬ。
大いなる花瓶のほとり。
夢の園は、薄き湯靄の間に浮き殘り、

かぐはしき木の實の下を、恍けたる我がたましひは、鳩の如く輕やかに歸り來たる。

磨かれし石の床より、我が肉に傳はる滑らかの心地よき冷感は、視界を疾く現實の強き色と明るさとに變へ、

こゝに、血の塊りの如き濃紅の花冠よ、

わが心は激しく衝かれ痛み、轟き眩ふ。

春の後

雨と青葉との中なるガラスの尖つた家。

その中に捕はれた暗色の女。

しなびた紅い花を手のひらに捧げ、嬌めいた態を作つて、あらはな謎を踊る。

あれ、また、皺の貫いた笑窪を、曇つたガラスに推し付け、

傍へ行く男の足音に聽き入る。

あの眼つきよ、

渦の頂

死者のあの微笑。
その暗い静けさを、今朝の野のいづこにも、わが耳は悲み聽く。

空虛と地中とを通じて徐ろに流れ籠もる、音なき諧調の、夕ぐれの潮のやうに軟らかな深い色よ。
この重くして圓い大いなる音波の、包まれた響に痲れわたる心のいとも微かなる顫き。

惱ましき甘い恍惚の渦に捲かれて、われは、いま、死のやうに嚴肅の、そして究極の、この大いなる音樂の絶頂に登り眩

暈ふ。

幻盃の鏤嵌

さしのべた指の尖には、精氣の盃が燃える。
その緣を溢れる香ひ强き酒を透して、底に閃めく、鏤嵌せる猥らな形象の線畫よ。

舞ふ女よ、それが、お前の誇る若い生命の花の耀きなのか。
蠟燭の心を剪る小女よ、鋏を捨てい、鋏を捨てい。

は、は、は、は、は、は。
三重の蔽障は自動に開くわい。
それ、カアテンが、硝子板が、鎧扉が。
あれ、見い、涯し無い黒い坑を。星を呑んだ夜の大海を。

戰慄

日光に溶け入る煙のやうな、お前のほゝ笑み。
遠い音樂の顫えて深默にまで消え入るやうな、お前の聲。

お前の耳は絶えず何かを聽いて居り、
お前の指は絶えず何かを指して居るやう、
そして、お前の思念は、默した河のやうだ。

また、時としては、太陽を眞直に凝視する鷲のやうな、お前
の眼つきよ。
眞珠のうちの眞珠のやうな、お前の滑らかな顏は、見えない
星から、ふと落ちて來た影かのやうに、私の身体を通して、
寒い戰慄を送る。

眼と手と聲

夕闇の、思ひ深い、そして懶げな邪眼。
萬象は遽かに老いて、悲しく我れを圍む。
そこに、また、凡てのものを塗り消やす手あり。——あの遠い塔をも、また、あの深い坑をも。
世の始まりの混沌は、擦り切れて歸り來たり、
窶れ果てた、人類の母の遠くから訪ふ彼の聲。

空と壁

あの壁と空とが同じ色に、境目も無く續く時に、わが心も、
また、その同じ色に、深い〳〵空虛となつて仕舞ふ。
窓の無い壁。それと空の裾との間に、小さく私の立つた時、
わが兩側の、この二種類の鍼默は、それ〴〵に、わが心を鎖し、わが心を開く。——共に、その遽かなる凝止にまで。
一寸の裂線すらも無い壁よ、空よ。

それらへと、交互に我が頭の轉る時、わが心も亦た丁度そのやうに、なにものの浮き沈む一點の罅隙だに無い。

にほひ

遠い音樂の軟かさ。
あの靜かな、花やかな、そして又、死のやうに嚴肅な旋律。
いま、わが心を、鏡にかゝつた氣息のやうな影が過ぎ、
落ち行く日の光は、遙かの町に銅の粉を雨らす。

あの淡い萠黃色の、霞んだ、然し透明の、穩かな空。
そこに、暴風雨よりも更に强く偉いなる力が籠る。
深い〳〵夕ぐれよ。
それをも溢るゝ、この春の清新な香ひよ。

絕望

朝の星。その靜かな絕望。

泥濘の上には、新たに散つた花びらが、實現された終極の運命に、まだ醒めぬ暖かい夢を見つゞけて、軟らかに輝く。

徑の奥には、汕のやうな靄が、凡てその附近を嘲り挑む。

美しい、けれど、死のやうに冷酷な朝よ。

わが血には絶望の勇氣が走りまわる。

輕淡

流れる雲のやうに軟らかな瀧よ、淡い雪崩よ、花びらが散る。

潮のやうに花びらが散る。

春の夕ぐれは、葉並みの綠い、かなたの線を越えて、しろがね色の柳立つ砂の岸べに來たり、

凋み行く入日の仄かなる青み。

色の薄い歌を唱はう。褪めた歌を。古い歌を。

輕やかに花びらは散る。

廣告隊の歸り

死人の眼が、生きた人を見るやうに、夕闇は、咲き滿ちた花を見る。
高い星の暗示的な微笑。

赤い煉瓦の壁に添ふて、歸り行く廣告隊の紫の旗、青い旗。
その萎垂。
行列の色彩濃き假裝の人々は、色の無い唇を少し開けて、國土の無い民のやうに行く。

塵埃の鎭まつた小路。
青ぎつた簇葉のうら悲しさ。

雨

雨。滑らかな雨。
屋根に、園に、絶え間なき、輕い其の足ぶみ。
靜かなる誘睡歌。

窓の葉は樂しく夢み、

花神(フローラ)は恍乎(ろつとり)と聽く。

雨脚(あめあし)の巧妙なダンス。

萬象が樂手の軟らかな合奏。

新緑の葉亭(アーボア)。

雨そゝぐ自然の大いなる淡い宴樂よ。

森

綠の森の、軟かい、慰撫(いたは)るやうな靜けさ。

宥める慈母(はゝ)の優しい胸のやうに。

夕ぐれの日の光は、金泥(こんでい)の束(たば)のやうに斜めに流れ入り、

木立の奥に、明るく照らし出された古い墓域。

死のホームの花やかさよ。

軟草は豐かに生ひ揃ひ、水々しい若枝の匂ひ、

つやゝかな、色富める、廣い葉亭(アーボア)のやうだ。

死のホームの榮えよ。

子孫の情と「自然」の愛とに護り飾られ、

……あゝ、人間。その肉は樂みて盡き、たましひは、かく、
安らかに憩ふ。

トワイライト

石の窓からは、黄に濁みた薄闇が流れ込み、
靜かな湖と澄める空とは、二つの大いなる鏡のやうに相互の
底を映し、その秘奥を測り合ふ。
穩かな、深い夕暮。

カアテンの側に立ち、うつゝ無げに、屋外の廣い天地を斜視
する若い女。
白蠟のやうに冷たく青ざめた頰に置く、その白い纖麗な中指
に濃く新しい血の一滴のやうなルビイの珠。
地は將に其の心から震へ呻めき、三つの月が髑髏のやうに、
頽れた墓に似る雲間から喰み出そうだ。

斷章

1

「夏」は、いま、笛の音から。夕月の軟らかさから。そよ風の輕さから。

2

「夏」は、いま、女の帶の色から。洗ふた髪の香ひから。葉の下の食卓から。

われは見つむ、その言葉を。わが耳は、その音を捕へ得ねば。
われは見つむ、ひたすらに、その色を、その表情を。——啞者のやうに。
あゝ、自然よ。その言葉よ。

3

こゝに青葉の徑は盡き、靜かなる夕の光を浴める白い壁の上に、ふと、われは、わが生の幻畫を見つめたり。
かなたには、遙かの森の上に、白い塔が、落日に照り映えて、
巨大なる花のやうに立ち。

4

濕つた土の香ひ。眩しい鮮綠の若葉。電流の脈搏つ曇つた空。
地中には、いま、青黑い血が滲み亘り、灰色の空氣には、透
明の網が重く張らる。
慧星は、もう、遠く通過し、雜草の貧しい磽确の一點から、
光澤の無い白い花が高く咲き出で、人の心を喰ふ眼つきして、
枯れた幹のかげから覗く。

5

まどろめる者の呼吸は、夕闇の閒寂と雜り、
時計のチクタクは、地心の脈のやうに搏つ。
實れる野の香ひ。
そよ風は、爪立てゝ、思ひ深く行き、
星は己が背後を見つむ。
窓！　暗い窓は無窮へ開き。

6

霞める夜の水の上を漂ふ二つの歌のやうに、君と我れと、涯なき闇に、こゝろの曲節を撒く。——流れつゝ、相互の調を聽きつゝ、四周の波に搖られつゝ。
相見えぬ二つのボートよ！　それ〴〵の舳は何方へ行く。

7

雨はりん〳〵と降り、遠くで閑古鳥が微かに啼き、我れは葉櫻の赤い果を見る。
滑らかなはよ。わが心は輕やかに伸び、あたりの音と形との寂しさ。

8

人々は色薄く動き、地球は默然とまわる。
あの空虛な、乾びた微笑！　靜默に、そして深く怪しい微笑
——生！
鷲頭獅身像のやうに、いら〳〵と尖つた胸をして、あの翼の冷たさよ！　生！

9

この透明な無限の晝。
この、どこからか始まり、どこからか盡きる人の住域。
空も、水も、林も、皆な幻影のやうに奇怪な現實！
これらの裡に、人間は、希望や歡樂や、はた、悲嘆や、みな、
型で鑄たやうに其の輪廓の明瞭な生活を爲る。
この、無限に浮ぶ有限！
この、不安に巣くふ安易。——人生！
——大いなる甘い幽鬱！

堤に添ふて、チミッドな、弱々しい微笑が漂ふ。
死に行く人の口端に浮ぶやうな微笑。
靜やかに薄曇りした日。
葉柳は懶るく垂れ、
針金の圍ひせる草原、
どこからか、破損れた吹風琴の疲れはてた、惱ましい錆ある
單調の音が聞え。

12

あまたの星は、群れ居る若い女たちの眼のやうに輝き、
アーク燈から溶け降る光の糠雨の淡いリズム。
その歌の精靈は、薫り濕める花むらの中から、姿となつて仄
やかに匂ひ浮ぶ。
幻想よりも輕く軟らかな夜。
夢よりも杳かな綠園の深い繁り、
あらゆる影の壞れ〳〵て相互の胸にまで泌み入る甘惱！
ものかげの石すらも音を立てゝ微かに呻めく。

13

夜咲く花の妙に、悲しき如く、いとも黑き日は來たり。
我がこゝろの帆は弛み、しほたれ、破れたる翼の絕望をもて、
捲き挑む渦潮の力を冷やかに測る。

生命の水は石盤の色をなし、
暗い森に棄てられたやうな心の核の寂しさ。
夜は軟らかに靜けく、濕つた樹の皮の香ひ、溶けて行く雪の
香ひ。

14

落日の低い光は、最後の絶望をもて、石角にのたうち悶えながら白壁の裾を摑んで居る。——葬禮の炬火のやうに並べるヒバの間から。

急ぎ來る夕闇の喘ぎは、濁れる水の香ひを呼吸き、
蒸されたる草原に籠る鈍い鬱憤。
われは夢む、この時、動かざる瞳をもて、——暗い血の漲れる
鐵色の簇雲と激浪とを、遠い海の冲に。

15

白い崖を白い鳥が落ちて行く。
紅ゐの花は痙攣し、
おびえた蜥蜴が日の光に青く閃めき。
刹那、渦卷く虹の幕は張られ、動くものの影、脈打つ赤酒は
流れ、イスカリオテのユダが接吻の音。

16

焼けた砂ほこりの、雨粒を煮る臭ひ。

黄色い花は顫え。
地は痺(しび)れ、草の根を冷たい戦慄が通る。
夕闇は斑らに淀み流れ。
「夏」は病めり。
あの青白い痙攣――稲妻の痛い曲折。
ふと、わが心は描きぬ、強く明らかに、――オーローラ！
對半球を燃やす東紅(オーローラ)！

南

すべて、明るく濃く美しいものは、南から。
春や夏も。

南！
ゴムの樹の葉蔭に、または、龍眼肉果(ダンダンメー)やバナヽを喙(くちばし)みながら、
水顔料(みづえのぐ)よりも鮮かな羽色した小鳥らは、いかにロマンチック
な、幻想的(ファンタスチック)な歌を唱ふだろう。
そこには、すべてのものの生は。その日光と共に強く烈しく、
とこしへに若く燃ゆ。

至純の愛も憎みも、唯その國の人々のみが爲す。
智と文明とに累はされぬ彼等、森嚴な原人種。
力こそは、その國と人との運命だ。
あゝ、南！
力と詩と美と自由との南！
生きた神と惡魔との南！

土用入る日

ドロの木は、つやゝかな綠の圓い葉を、掌のやうにパタ〳〵と打ち鳴らしながら、体を激しく左右に振り動かす。
ドロの木は喜び狂ふて居る。
しろがね色の雲は飛び、うらゝかな空は、鏡のやうにジッとして居て、荒れまわる風を心のまゝに使ふ。
小鳥ですらも、胸を張り、頭を擡げて、雄々しく、屋根の上を彈力的に歩いて居る。
人間！　彼等ばかりが、あと足で立ち上がつた熊よりも、もつと醜態な形狀をして、金色の光燃え立つ大道をイチヤ〳〵と行く。

なぜ、お前たちは、四這(よつばひ)になつて、その兩端のドブの中を、土鼠(もぐら)のやうに堀らないんだ。

夜の路上

黑い笑ひ。女の錆びた聲。濁つた空氣の振動。
重苦しい、路上の刹那の壓塞。
そこに、かしこに、臙脂(べに)の黑く光る唇。油の黑く光る鬢。黑い乳首。——斷散(ばらく)の幻影。

蒸れる闇の厚さよ。
鼻さきに渦まく褐色の霧の波紋——
腐肉の臭ひ。——蛇のやうに冷い肉の。

綠草

この情感を如何に歌はう。
暗い日。綠草は皆な針の如く。

この、いら〳〵しい、然しながら冷静な心よ。
わが胸は、いま、丁度、火を望む火藥の壺のやうだ。

綠草。
あの冷やかに燻ぶる色よ、仄かに、搖れもせず、やわらかに、
やわらかに。

水分の飽和した空氣。
脂肪の過ぎた老人のやうな懶さ。
矛盾に充ちた日。
あゝ、この情感の鈍い鋭さ！

太陽

大いなる、悲觀の瞳。——太陽。
それが、地平の涯から、この世を覗く刹那にも、萬象の影は、
直ちに、暗く地の上に示さる。

やがて、陽はに、それがジッと眺める時、青葉は力なく垂れ、
花は悼ましく萎れ、水は弛惱れて、のたうち、山は喘ぎて臥
す。

いとも咀ふべき瞳、太陽。

かの魔眼の、終日、あらゆる物を見つめ圓つて、倦み疲れ、西の涯へ落ち去る毎に、萬物の生命は次第に吸ひ奪られて行く。

＊　＊　＊　＊

刷印日一十月八年三十四治明
行發日六十月八年三十四治明

定價金貳拾五錢

著作兼發行者
岩手縣盛岡市•内加賀野•三
細越省一

印刷人
岩手縣盛岡市吳服町三十四番戸
吉倉藤工

印刷所
岩手縣盛岡市吳服町三十四番戸
富士屋印刷所

發行所
岩手縣盛岡市•内加賀野•三
悠々書樓